

## 米国教育のナチ化

ヘンリー・ジルー（批判的教育学研究者）著、脇浜義明訳

原典：Henry Giroux, “The Nazification of American Education,”

Counter Punch, July 22, 2022

\*脚注はすべて訳注



Photograph Source: Matt Johnson – [CC BY 2.0](https://creativecommons.org/licenses/by/2.0/)

私は、民主主義の中に国家社会主義が存在していることの方が民主主義も反するファシズム傾向の存在より、もっと危険だと思う。 — テオドール・アドルノ

### 学校をプロパガンダ工場にするデサンティス

米国教育の危機は米国民主義の危機であるだけでなく、米国がファシズム国家になるイデオロギー的、構造的基盤である。教育政策が社会を無法と専制主義へ移行させようとしているのだ。教育政策が抑圧的な社会支配と人民の想像力破壊を促進し、デストピアへと導いているのだ。この考えられないような破局へ導いているのは、フロリダ州知事の共和党の極右政治家ロン・デサンティスである。婉曲語法で「愛国教育」と名付けるプロパガンダ教育がフロリダ州で猛威を振るって、フロリダが米国教育のナチ化の中心となっている。生徒と教員と親に強制と服従を強いる宗教的・政治的・経済的原理主義のとんでもない形態が、すでに弱体化し陰りを見せている米国公教育を窒息へと追い込んでいる。赤い州と言われる共和党が強い州では、ほとんどの教育機関が、私が「教育のナチ化」と呼ぶものの実験場

となっている。1930年代のドイツで見られた抑圧教育が再現されている。

かつての米国の偉大な教育者ジョン・デューイの遺産である教育理念は偏狭な極右デサンティスとその官僚によって次々を破壊されていく。デューイは、正しい情報に基づいて判断する力、公的な対話、異議を唱える権利、批判力、思慮分別ある識別力、嘘と真実を見分ける学力を養成する教育が民主主義政治にとって必要であることを説いた。そういう教育によって育つ国民が民主主義の発展にとって絶対必要な「問いかけの文化」(culture of questioning)を形成・参加するとしたが、デサンティス等はそれを否定する。民主主義的・批判的・創造的な教育があれば、それを学校や社会から取り除いているのだ。デューイが民主主義への脅威となるとした「公衆の日食」(eclipse of the public)<sup>1</sup>を、デサンティス等共和党右翼政治家が作り出しているのだ。デサンティスは、社会を批判する書物や人種差別に関する議論の禁止、教員に州政府権力への忠誠を誓わせること、シラバスのオンライン公表(授業内容の検閲)、教員の終身在職権の制限、学生による授業の無断撮影の許可などを立法化した。これら州法は階級的・人種的マイノリティに照準を合わせたものであるばかりか、民衆から考える力、疑問を持つ精神、正しい情報に基づいて議論したり批判したりする能力、政治参加する意欲を奪う戦争である。公教育を破壊する法的攻撃であるばかりか、主権在民という民衆主体性の基礎を切り崩す一斉攻撃である。

大学など高等教育にもデサンティスの攻撃は続く。彼は高等教育の場を「社会的想像力が死滅するデッドゾーン、直接的金銭的実利に繋がらない発想や思想や議論や研究の追放、異議を唱えたり、お上の責任を問うような発言をする教員や学生を懲戒処分や暴力脅威で沈黙させる場」にしようとしている。社会的善と民主主義を維持・発展させる公的領域としての学問の場を破壊し、学生から批判的思考能力、他者に対する同情、批判的教養(critical literacy)、自己の良心と倫理に従って行動する勇氣、公と私の社会契約への支持、市民的想像力を身に着ける機会を奪うものである。この抑圧政策を、「フロリダ州の学校が社会主義者製造工場になるのを防ぐ」という馬鹿げた主張で正当化する。小・中・高・大すべての教育段階で若者が「アカ」の思想や教材に感化されるのを防ぐべきだ、と主張する。そのために、嘘を教え、社会的想像力を窒息死させ、若者を脱政治化させ、学校を軍隊式の懲罰機構、プロパガンダ工場、治安監視国家を支える重要な構成物に変えるのだ。

共和党とデサンティスの教育政策は、多くの点で、ロシアでプーチンがやっていることと似ている。ロシア政府高官セルゲイ・ノヴィコフの最近の発言を引用すると、「プーチンの狙いは国家イデオロギーを生徒たちに叩きこむことである。そのために生徒をわが国のイデオロギーに効果的に染める教育学が必要である。我々の作業は生徒の意識を作り変えることである。」まさに、デサンティスがやろうとしていることと同じではないか。

マックス・ブートは、デサンティス知事の教育政策は「言論の自由と学問の自由を破壊するもので、国政にとって非常に危険な専制主義、異質のものに対する執念深い憎悪を体現している」と『ワシントンポスト』に書いた。

---

<sup>1</sup> 政治的結果と国民の想いと乖離。

デサントイスの政策は人種、宗教、性的指向少数派の若者への懲罰という点に特に力を入れている。ヘイトスピーチを公然と法律文に組み込み、トランスジェンダー若者を社会的除け者にし、同性愛嫌悪を政治的推進力にし、黒人への差別的攻撃を加速している。デサントイスは、実際に暴力行為を行わなくても、暴力の脅威で人々を脅すという方法がご都合主義的に問題を解決する最良の方法であり、それが愛国心の表現だという狂気じみたトランプと極右政治家の潮流を受け継いだ政治家である。彼の政策は、自分に反対する者、とりわけ彼の教育破壊と同性愛嫌悪法律を批判する知識人、教員、生徒の親、若者、地域活動グループに暴力で弾圧するぞと脅す政策である。彼の政策は、「侵攻・教育・商業ユナイテッド」(FEC ユナイテッド)の創設者ジョー・オットマンのようなキリスト教原理主義的ファシストが賛美する暴力的粛正と同じ路線に立っている。オットマンは自分のポッドキャスト「コンサーバティブ・デーリー」(保守主義通信)で、教員は「生徒をゲイに育てる」、LGBTQ教員を「自動車の後に括りつけて、手足がバラバラになるまで引きずり回せ」と書いた、とポール・ローゼンバーグが指摘した人物である。これは1950年代に米国で吹き荒れて数千人の文化人や演劇人や報道人を「アカ」容疑で職場から追放し投獄したマッカーシズムを思い起こさせる。デサントイスの政治手法と反動的教育政策はナチ時代のドイツの教育と歴史の塗り替えと血縁関係にあると言える。この点は、主流メディアや進歩派メディアのデサントイス教育政策議論で見逃されている。

**ナチ・ドイツの教育** 第三帝国の教育の研究は、抑圧的教育が青少年のアイデンティティ、価値観、世界観の形成に大きな影響を及ぼすことを明らかにしている。ナチの教育を見ると、つまるところ教育は行為主体性、イデオロギー、知識、権力、未来に関する闘争であること、つまり常に政治的闘争であることが見えてくる。ヒトラーにとって教育は民衆の洗脳であった。特に若い世代の集団意識の形成はナチ政治の不可欠な要素であった。彼は『我が闘争』の中で「若者を支配する人々には未来がある」と書いた。『アドルフ・ヒトラーの教育理論』を書いたリナ・バフィントンたちによれば、ヒトラーは若者洗脳闘争をナチ教育の重要戦略と位置付けていた。「ドイツは若者がドイツ人として思考し、ドイツ人として行動するようになる教育を必要とする・・・彼らを自由勝手にさせない」と『我が闘争』の中に書いている。そのような教育体制は巨大なプロパガンダ・マシーンとなり、若者を「ナチ・イデオロギーに盲従する」ように教化することを目的とした。そこでは立派な肉体的機能、人種的優越意識、国家主義的狂信が特権化された。ナチ教育体制で最も尊重されたのはアーリア民族優越の純粹民族主義であった。

教育の最も重要な目標は人種意識養成で、その意識で青少年を統一し、国家的名誉とか国粹的狂信主義への忠誠を植え付けた。その目標達成とそれへの対抗や疑問を防ぐために、歴史が書き換えられ、従来の歴史書や教科書が破棄され、禁書にされた。ナチにとって危険と見做された知識や情報を含む書物や思想や授業が禁じられ、「書店や図書館からも」追放された。

ナチの教育は子どもを教育するのではなく、子どもを型に嵌め込むことであった。「劣等」とか「無価値」とされた人種が学校から排除され、彼らのことを述べたまともな本や歴史書が図書館や学校から追放された。ナチの教育は反知性的で、生徒から自分で考える力を奪った。『ホロコーストの説明』(The Holocaust Explained)の共同執筆者が述べているように、「ナチは教育を脱知性化した。生徒が疑問を抱いたり自分で考えることを奨励しなかった。生徒に服従とナチ思想への盲目的信仰を教え込み、ナチにとって理想的な未来世代に育てようとした。」服従、画一化、検閲、抑圧、教化という巨大なマシーンを通して、ナチの学校教育はプロパガンダ工場となった。教員への厳しい監視が行われたばかりでなく、生徒や仲間の教員にスパイを奨励した。ナチに非協力的な教員は、教育から排除されたユダヤ人と同じ扱いを受けた。

共和党の反民主主義的政治手法を批判する評論家たちは、デサンティス等の政治にはナチのアーリア人賛美と同じ性質があることを見落としている。白人置換理論や白人至上主義の台頭ばかりでなく、黒人の投票を妨害する州法の制定や、学校の授業で差別の歴史を教えることの禁止や、教科書検閲や図書館から州政府の気に入らない書物の追放、批判的教員への迫害などに、それがはっきりと見られる。ナチの教育の批判的指向、自由闊達な討論、批判的書物、知性、マイノリティ嫌悪という特徴は、現在の米国教育にも見られる。ナチの教育と米の教育との類似は、デサンティスの反知性的教育政策、歴史の書き換え、禁書、「愛国心教育」、性的マイノリティを虐待する法律、抵抗する教員、親、有色人青年に対する脅迫などに見られる。現在、米国で図書館に対する攻撃が行われているが、それもナチとの類似になる。LGBTQの人権に関する本や人種平等に関する本を置いている図書館の職員を、極右が変質者とか小児性愛者だと攻撃している。極右の要請に応じて本を破棄しない職員を、「子どもを性的異常者に飼育する罪人」として攻撃、刑事裁判にかけている。

ナチ・モデルは、社会を純粋人種主義、歴史の歪曲、超国家主義、絶対的指導者のカルト化に変えるイデオロギーの機能について、我々に多くのことを教えてくれる。デサンティスのもとでは、白人至上主義、構造的な人種差別、青少年の洗脳が公的州政治として、正統化される。無価値とされる若者(LGBTQ若者)への攻撃、教育の質の低下、政治的リトマス試験で非協力教員をあぶりだす思想調査、知事の考えに従わない本や論文や記事を検閲して摘発する行為、知識を人種的に序列化するやり方、生徒を洗脳する道具としての教科書を作って配布するデサンティスのやり方は、教育を教化と支配の戦略として使ったナチとまったく同じである。

専制独裁主義の恐怖が今やデサンティスのような白人至上主義者のために戻ってきた。長く燻り続けていたファシストの大衆支配・動員の欲望が、女性の生殖権攻撃や黒人の投票権妨害などの共和党政策の中で息を吹き返したばかりでなく、もっと狡猾であり人目につかない教育攻撃の中で吹き荒れている。これらの攻撃は、民主主義にとって重要な公的制度、市民の批判的行動主体、正しい情報に基づく市民意識、政治参加、個人と公民の自治能力を破壊しようとする反革命である。その核心は、民主主義と社会的想像力への破壊攻撃で

ある。

白人至上主義者にとって批判的教育学は大きな災いとなる。それは他者への憎悪、偏見、人種差別を刷り込む右翼の教育と正反対のものだからである。批判的教育学が実践する反人種差別教育は、今のように白人生徒が白人至上主義の毒牙に蝕まれている状況の中では、特に重要である。多くの白人生徒は疎外状態で、バラバラで、孤独感にさいなみ、目的意識がなく、何らかの共同体的意識に飢えている。そういう心の隙につけ込んで、白人至上主義はオンライン・ビデオ・ゲーム、チャットグループ、ティックトックなどのプラットフォームを使って、白人の子どもを白人至上主義の隊列に加えようと働きかけている。イブラヒム X ケンディは「白人の子どもが白人至上主義思想に感化されている。彼らは白人至上主義者の目標にされ、他者への憎しみを学習している」とアトランティック誌に問題提起した。彼は「推定230万人のティーンエイジャーが毎日マルチ・プレイヤー・ゲームの中のチャットで白人至上主義イデオロギーと接触し、13歳～17歳の少年少女の17%が…ソーシャル・メディアで白人至上主義思想に触れている」という名誉棄損防止同盟の2021年レポートを紹介している。そして、こういうファシズム脅威から子どもを守るのは反人種差別教育しかないと言っている。反人種差別教育で子どもたちに白人至上主義の危険を認識させ、それに抵抗し、他者への憎しみや嫌悪を受け付けず、嘘と真実を見抜く力を身に付けさせることが必要だと力説している。白人至上主義の毒牙がソーシャル・メディアに充満して白人の子どもに大きな影響を与えていることに関して、ケンディは反差別教育という解毒剤の必要を力説している。「白人至上主義の危険を知らなければ、白人の子どもはそれに反撃できない。平等思想を教えなければ、子どもは白人優越というヒエラルキーに抵抗できない。真偽の区別をする識別力を教育しなければ、子どもは嘘を見抜けない。全米教育協会が発表した論文は『白人生徒の白人至上主義的過激化を防ぐ一番よい場所は教育である』と書いている」と、ケンディは述べている。デサンティスなどの共和党政治家は多くの脆弱な白人生徒の心に白人至上主義思想を注入し、同時に批判的思想を検閲で排除し、米国の人種差別・迫害・虐殺の暗い歴史を塗り替え、禁書を行い、教員の授業に制限をかける。そうすることで、差別とジム・クローの歴史を見えなくし、生徒の批判力の成長を破壊するのである。奴隷制度や差別の歴史を抹殺し、白人の特権、不平等、公的暴力がまかり通っていた過去へのノスタルジアを復元しようとする。その素晴らしい過去を潰したのは有色人である。過去の罪に対する告発で白人を不当に苦しめていると、デサンティス等は考えるのだ。彼の公教育と高等教育に対する攻撃は一種のアパルトヘイト教育である。

デサンティスのファシズム的教育政策は無知と人種憎悪の混合物である。例え間接的にせよそれが及ぼす影響は致命的である。バッファロー市のトップス食料品店で黒人客に銃乱射をして10人を殺害した自称ファシスト白人青年の事件のような銃乱射事件がたくさん起きている。デサンティス知事のもとでは、学校から歴史意識、批判力、正しい知識が消え去り、生徒は誤れる知識を与えられるだけでなく、白人至上主義者が大衆文化の中に埋め込んでいる歴史の改ざんや偏向思想のために集団洗脳されていく。プラウド・ボーイズや誓

いの守護者 (the Oath Keepers) のような極右団体は、チリのファシスト故アウグスト・ピノチェトを美化し、シャツやステッカーや旗を彼の写真やイラストで飾っている。デサンティスや共和党ゾンビーが作り出す教育世界では独裁者ピノチェトが歴史に登場しないので、若者たちは極右のピノチェト利用が分からない。つまり、教育抑圧と集団的忘却による暴力が直接結び付くのだ。

現在36州で共和党が人種差別的教育を推進している。その問題点をもう一度整理してみよう。由々しい問題は、批判的思考能力への攻撃である。見聞が広く判断力のある市民を育てる基礎となる分析的思考と情報判断能力を養育する教育学を攻撃していることだ。それは反人種差別教育やその論理への総攻撃であるばかりか、批判的教育学全体への総攻撃である。批判的教育学は反人種差別教育を含むのはもちろんであるが、もっと広い分野に関するものである。それは人倫に基づく政治的教育理論で、その目的は生徒に基本的に必要な知識、スキル、価値判断力、社会的責任感を身に付けさせて、彼らが批判的に社会と政治に関わる主体となるのを支援する教育学である。それ故、批判的教育学はファシズムと専制的独裁主義に繋がるすべての要素と闘い、同時に人民の力、民主主義的価値観、公平な社会関係、集団や共同体の自由な活動、すべての人々の経済的権利と社会正義を実現する社会体制がどんなものかを想像する知力があり、社会意識がある市民を育てる基本的教育学である。それはすべての国家や社会で実践できる教育である。だから、批判的教育学は現在米国政治を動かしている白人至上主義者やファシストや過激派にとっては弾圧すべき危険な教育なのである。

確かに現在は恐ろしい方向へ進んでいる。その意味で、かつてヘレン・ケラーがナチの若者に書き送った手紙を思い起こすのは意味があるだろう。彼女は「あなた方は人の考えや知識を抹消できると思っているなら、歴史から何も学んでいないのです。昔から暴君は何度も人の考えや知識を抹消しようとしたましたが、いつも知識がそれに反発し、暴君を滅ぼしてきました」と書いた。彼女にとって、希望を失った歴史は死んだも同然で、ファシズムの扉を開くものだった。しかし、正しい歴史に基づいた知識や思想が大衆運動と結び付く場合、それはファシズムと戦うモデルとなる。エレン・ウィルスはヘレン・ケラーの希望の歴史の上に立って、左翼に大衆運動を起こせと呼びかけている。その呼びかけの中で、新しい言葉、新しい教育、人々の必要に語りかける文化政治の創造を訴えた。「望ましい新しい社会のビジョン」をみんなで作成し、「そういうビジョンを作成できる新しい生活様式と新しい制度を創造する大衆運動の必要」を呼びかけた。ウィルスの呼びかけは先進的であるが、すでに弱体化した米民主主義の残存を徹底的に破壊しようとするナチ化が進む現在、それは差し迫った必要である。